

漱石作品における非外来語のカタカナ表記について

(要旨)

林 慧君

カタカナで外来語を表記しようとする態度は、新井白石の『西洋紀聞』からも見られるとされるが、蘭学の伝統を経て、近代以降一般的に、外来語はカタカナで表記されている。夏目漱石の作品においてもカタカナは外来語の表記に用いられたのが原則のように思われる。しかし、外来語ではないにもかかわらず、カタカナ表記が用いられている例、例えば「イトコ」「イカサマ師」「バツタ」「カツカツ」などが見られる。

本稿では、漱石作品においてカタカナで表記されている非外来語を考察対象に取り上げ、これらにはどのような語があるのかを調査し、それらの表記機能や特徴などを考えてみたい。対象作品は『吾輩は猫である』をはじめ、『坊っちゃん』などの14の作品であるが、それらの作品におけるカタカナで表記されている非外来語を調査することにした。

結果を見ると、非外来語のカタカナ表記例は十種類の語があったが、その殆どは和語であり、漢語は僅か2例のみであることをまず確認できた。和語の内訳は、擬音語、笑い声、感嘆詞、擬態語、動植物名、促音・長音、ケ・ツ、特別な表記習慣である。

なお、これらの語をカタカナで表記した理由は、慣習的な特殊表記、音の強調、そして特別な表現意図(周辺的な意味を有する語)と三つのタイプにまとめられると思われる。その数は、音を強調するものが一番多く、特別な表現意図(周辺的な意味を有する語)のものが次で、慣習的な特殊表記が一番少ない。前の両者が漱石作品における、非外来語のカタカナ表記の主な理由と考えることができるが、これは、カタカナの本来有する表音機能が大いに果たされ、また漢字ひらがな交じり文に対

する表記上の少数派というカタカナの性質が活かされるため、漱石の意図した(文脈と語の)感情的意味を存分に表すことのできたと思われる。

本稿で扱った十種類のカタカナ表記の非外来語を漱石作品におけるカタカナ表記の「モノ」と考えるとすると、その「モノ」を通して、音の強調や特異な感情的意味といった、作品における漱石の特別な表現意図である「コト」を表していると考えられるのではないだろうか。